見て居れば、ぞふ朝鮮造の柔送し。加茂の紋ふ同じも有び一番像を
磨き上げ手腕料理の闘戦致せば其當日の景を敷に誂らへの
以加勢有様主人と共に願ふものハ劇場の作者の岳辛也
竹紫其水記

一 御賣司
一 御料理 出前仕ル

東橋区鉄ム町天金楼
蛇の目寿し

東日月分実売仕る
前日の分麻景は上げ

仕出し以料理口條

新富座の顧見世芝居。さ闘場と諸共ふ。新築ふせし
仕出の闘店。先狂言ふ淮へて中さむ。伊野の経世が鮮者。
馬士が手馴し口取ふ。心を込し一座下も。かとぐまりけれど
石切梶原者も迷鱠の嘉瓜浪ふ。川岸の帰りを松
右ふつ。奈義へ風ひの水船あて生洲料理の御注文ふ。
鳥渡目先の放駒。濡髪ぐねさの以遣物造文ふ
限らび以注文を仰附られ下さらび芝居の合間も
絶間なく。四十八手の部屋丁大関迄ものも共。
び近道の関取流の屋居ふ附て無行致さび始終も
今日貴切の大入札を掛る中。御客方へ以報露音を
主人ハ皆て太鼓を拍子。陽う陽迄願ふ上外
竹紫其水記

○月○日見世びらき
一品あて出前仕ル

新富町五丁目
新富座劇場前
大 新